

## 『えいっ』の指導について

### 目標

「様子を思い浮かべて読みましょう。」と教科書にあります。この意味を考えると、物語を楽しみましょう、ということになります。楽しむためには、文章を読んで様子を思い浮かべるといことが必要です。(イメージし、紙芝居・ビデオを見ているようになること。作中人物に同化するということ)そこで、このお話の楽しさは、どこにあるのでしょうか。父子のある一日の思い出(日記につながる)とするか、子熊の成長とするか、いくつか考えられますが、児童の側からすれば、どんなところでイメージが広がるのでしょうか。

### 「父子がいい気持ちになった話」と考えるとよさそうです。

いずみ会では、七変化の教式(指導過程)で授業します。その指導過程に沿うと教材研究と案が同時に仕上がります。

### 第一次指導 概観の指導 一時間

#### △区画▽

案を考える時に、まず、話をいくつに分けるかを考えます。説明文などは、形式段落で区画する場合もありますが、物語文の場合は、場面展開によって分けることが、自然です。でも、場面の展開を、時・場所・心理など、どの視点で見えるかによって区画も変わってきます。そこで、どの視点での区画が、一番大事な場面を浮かび上がらせることにつながるか、を考えます。

そして、手引きが出しやすいかどうかも考量し、最終的に区画を調整します。

低学年の場合には、挿絵を手がかりにして区画するのがよいようです。今回も、場面展開と挿絵が重なっています。絵が六枚ありますので、六つに区画するか、三、四枚目を一つにして五つに区画するかを検討します。どちらでもよさそうです。「六とく」の扱いを考えると六つに区画する方が楽しめそうです。(題名の「えいっ」で八つに区画する手もありそうです)

一よむ 六区画(2・4を二名ずつ 計八名)

\*指示 ゆっくり大きな声で読む。本を両手でもって腰を伸ばして静かに聞く。

・評価 読み手と聞き手の努力を評価する。

二とく(指とあるのは指示の意です)

#### ○題目

題名を板書する。

\*指示 黒板に書くので黙って見ていること。

・ゆっくり丁寧に板書する。

・最初に「えいっ」といったのは誰ですか。(父)

指 その絵を開けてください。

・熊の親子は、この信号が何に変わったらこちらに渡って来ますか。(青)

・青が変わって感心したのは誰ですか。(子)

・熊の子は、何才ぐらいでしょうか。(四歳位)

・父さんと二人で町に来たのは、初めてのよう

です。信号機を見たのも初めてのようにです。二人は、これからどこに行くのですか。(店)

◎ひびき

指 ポップコーンを抱えている絵を開けて……。

・子熊は、右手で何をしましたか。(ボタン)

・その時に、ボタンを押しながら何と聞いてみ

ましたか。(えいっ)

指 子熊が「えいっ」といった絵がもう一枚あります。そこを開けてください。

・ドアの向こうには誰が出てきましたか。(母)

・子熊は、母さんの顔を見た後、誰の顔を見上げましたか。(父)

・父さんの「えいっ」に感心した子熊が、自分でも「えいっ」と使えるようになった話です。

夕飯の時、一番お話したのは誰でしょうね。

#### ○手引き

指 「えいっ」といった後、子熊が見たものを文の中から探して書き出してください。絵を見ると探しやすいです。

指 ノートを開けて、題名と日付を書いたら一番上のマスに1、2、3、…6と横に書いてください。(教師は、横一線を板書し、六区画に分ける。児童は、横線を引かなくてよい)

三よむ(黙読)

四かく(視写)

・最初、みんなでやります。1の所では何を見ました。(信号の青)

指 信号が青に変わったのを見ましたので、短く青と書きます。(青、板書)

・2の所は、何を見ましたか。二回、「えいっ」とかけたので、二つ書きます。(黄色 赤)

・3の所は、「えいっ」の後、何か見ましたか。指 何も見なかったのので○を書いてください。

指 4、5、6の所は、自分で探して書いてください。(机間指導に回る)

\* (机間指導し、4を書き、また、机間指導して、5を書くというようにするか、机間指導後に子供に発表させて書くかは、状況判断で)

指 5を書くとどうなるか、状況判断で)

指 5を書くとどうなるか、状況判断で)

指 5を書くとどうなるか、状況判断で)

指 5を書くとどうなるか、状況判断で)

指 5を書くとどうなるか、状況判断で)

指 5を書くとどうなるか、状況判断で)

指 5を書くとどうなるか、状況判断で)

指 5を書くとどうなるか、状況判断で)

指 5を書くとどうなるか、状況判断で)

指 5を書くとどうなるか、状況判断で)

指 5を書くとどうなるか、状況判断で)

指 5を書くとどうなるか、状況判断で)

指 5を書くとどうなるか、状況判断で)

指 5を書くとどうなるか、状況判断で)

指 5を書くとどうなるか、状況判断で)

指 5を書くとどうなるか、状況判断で)

指 5を書くとどうなるか、状況判断で)

指 5を書くとどうなるか、状況判断で)

指 5を書くとどうなるか、状況判断で)

五よむ（全頁で音読 指黙読後に指音読）

指 最初は、声を出さずに、鞭に合わせて口ばくしてください。（指黙読）

次に、声を揃えて、大きな声で読みます。青はい。（指音読 読後、評価する）

六とく

○事実・区分（書かれた言葉に関連をつけてから区分する）

・ 二人が「えいつ」と言って出したものは何でしょうか。（切符）

・ 最初に切符を出したのは、誰ですか。（父）

・ 父さんの「えいつ」でうまくいったのはどれですか。（1）

・ 子熊が父さんに注文した「えいつ」は、何ですか。（赤信号）

・ 信号の赤を出す前に出てきてしまったのは、何ですか。（黄色）

・ 父さんが困ったような声になったのは、何を出したときですか。（星）

・ その後、困った顔になりました。何を出してくれと言われたときですか。（月）

・ 母さんを出したのは、だれの「えいつ」でしたか。（くまの子）

・ 大好きな母さんが出てきてので、嬉しそうに父さんと顔を見合わせた熊の親子の話です。

△区分

・ 電車に乗っているのは何番ですか。その前は、どこでの話ですが。その後は、どこでの話ですか。町のところを2つに分けるとどこですか。（1・2と3・4と5と6の四区分になり、

起 承 転 結 となります。）

◎山 【起承転結は、言う必要はない】

・ この話の面白いところを三時間勉強します。子熊が嬉しくなったところ（6）父さんが困ったところ（4）子熊も父さんのようになりたい思ったところ（2）

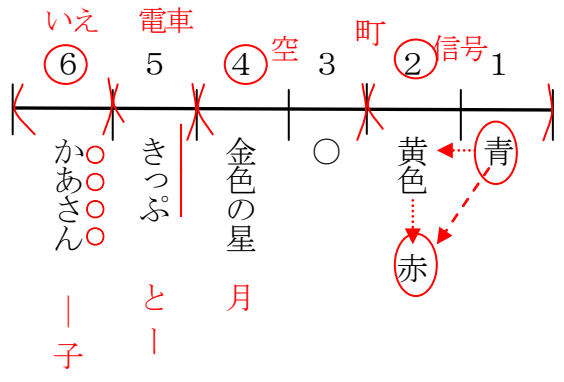
○余韻

・ 夕飯時にはどんな話が出たのでしょうかね。

七よむ 指音読 一回

△板書事項

えいつ



第二次指導 第一時

一よむ 六区画（2・4を二名ずつ 計八名） 前時の続きで順繰り読み

二とく

○おさらい（復習と言いつつ横一線を引き区画）

・ 1〜4は、どこでの話でしたか。（町）

・ 家のベルを押したのは、何番でしたか。（6）

・ 5番は、電車での話でした。ここでは、「えいつ」と誰がいったのでしょうか。（二人）

・ 思ったものが、一度の「えいつ」で出たのは何番でしたか。（1、5、6）

・ 1番で出たのは何でしたか。（青信号）（板書）

・ では、5番では何が出ましたか。（切符）

・ 6番は何が出ましたか。（かあさん）

・ では、何も出なかったのは何番。（3の下○）

・ 二度目の「えいつ」で出たのは何ですか。（星）

・ 子熊の注文で出したのは、何番ですか。（2）

◎承接

・ 子熊の注文は、何でしたか。（青→赤）

・ でも、結果はどうでしたか。（黄色→赤）

・ それを見て、子熊は、父さんのことをどう思いましたか。（えらいんだ）

○手引き

指 父さんは「偉いんだ」と思った子熊が、自分もやりたいといったところを書いて勉強します。そこを開けてください。

三よむ 黙読（p16 一〇行目〜 p17 四行目）

四かく 視写

「ぼくも、やってみようね。ねえ、とうさん。ぼくも、」

「できるようになるかしら。」

「おとなに、なればね。」

とうさんは、平気なかおを  
していいました。

「まあ、しつかりべんきよう  
するんだな。」

「うん、ぼく、する。とうさん  
みたいに、なりたい。」

### 五よむ (指黙読一回 指音読一回)

六とく

○語義・区分(難しい言葉はと、問うた後で確認)

・なるかしら 平気なかお まあ……だな  
する なりたい

・話者の確認 (父さんの所 前後の三分)

◎心

・子熊は、前と後では気持ちが変わります。どち  
らが強い気持ちになっていますか。(後)

・どの言葉にそれが出ていますか。  
(なりたい する)

・前は、自信がない。どこで分かる。  
(「みたいな」の「な」 かしら)

・父さんのどの言葉で元気になれたのか。  
(まあ、べんきようするんだな)

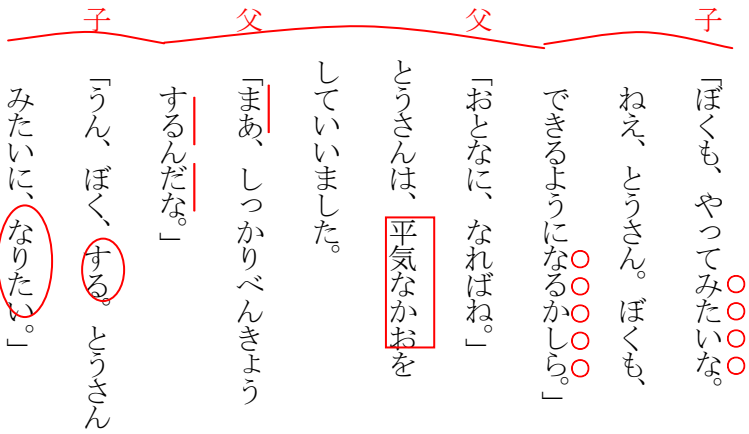
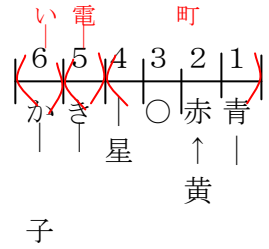
・面白い父さんだと分かるのは、どの言葉  
(平気なかおをしていいました)

○余韻

面白い父さんの「えいっ」の秘密に子熊が気  
づくのはいつか。

### 七よむ (指音読一回)

△板書事項▽



### 第二次指導 第二時

一よむ 六区画(2・4を二名ずつ 計八名)

前時の続きで順繰り読み

二とく

○おさらい

・自分も父さんのようになりたいと、思っていた子熊は、「大人になればね」と「勉強するんだね」と話してくれた父さんのどちらの話が気に入ったのかな。(後)

・「まあ、しつかり勉強するんだな」という話を聞いて「ぼく、勉強する」と元気に返事しました。大人になる前にできるようになるものね。

◎承接

・子熊は、早速勉強しました。次に何を見た時に不思議だと思いましたか。(金色の星)

・星が、最初は煙突の上に出ると思っていたのに、どこに出たのですか。(別のビルの上)

・それで、不思議に思った子熊に父さんはどんな話をしましたか。(星はわがまま)

・それで、子熊が考えたことは、何を出してもらうことですか。(月)

・月を出して言われた父さんは、困りました。どうしてでしょうか。(子どもの常識を確認)

・それで、いつなら出せると応えましたか。

○手引き

指 「今夜、いえでこはんを…から…とおさんは、ほっとしていいました」まで書いて勉強します。少し長いので、そのとき、『えいっ』って、から書いてください。(板書は、今夜から)

三よむ 黙読 (p20 四行目〜九行目)

四かく 視写

【感は黒板の隅に書いて見せる】

△板書事項▽

金色の星 わがまま

月

「今夜、いえでごはんをたべおわったころなら、ひまができているから、そのとき、『えいつ』って、よんでやろう。そうすれば、すぐ、くる。」

「いろいろと、気をつかうんだね。」

くまの子は、感心していいました。

「そうさ。それが、おとなっていうものだよ。」

とうさんは、ほっとしていいました。

五よむ (指黙読一回 指音読一回) 六とく

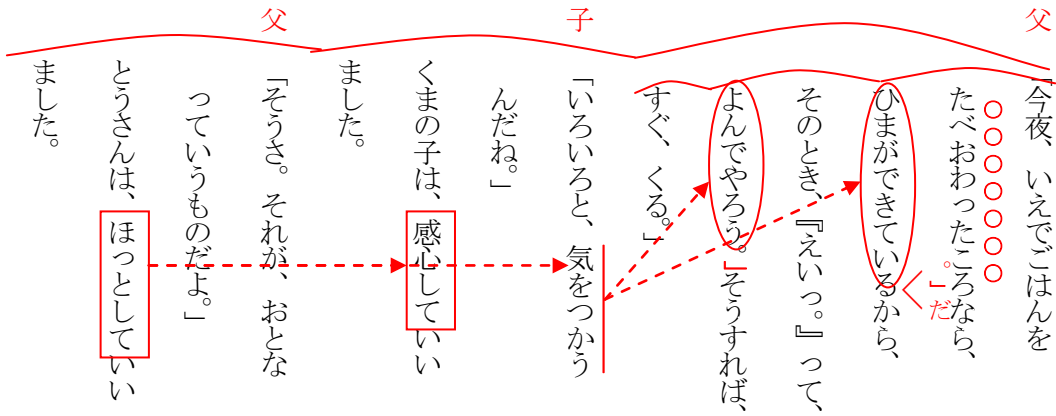
○語義・区分(難しい言葉はと、問うた後で確認)

- ・ ひまができる そのとき よんでやろう
- ・ そうすれば 気をつかう それが ほっと
- ・ 話者の確認後、子熊の所の前後で三区分し、最初「」を三区分する。

◎心

- ・ 父さんが「ほっと」したのは、子熊のどの言葉ですか。(気をつかう)
- ・ 気を使っていると考えたのは、父さんのどの言葉ですか。(ひまができる よんでやろう)
- ・ 父さんは、本当は誰に気を使っているのですか。(子熊)
- ・ 子熊の夢を壊さないようにと考えた面白い話に子熊がどうしてくれたの。(感心してくれた)
- ・ 今夜の月は、どんな月だろうね。父さんは知っているでしょうか。(月齢一六、七日の月)

七よむ (指音読一回)



第二次指導 第三時

一よむ 六区画(2・4を二名ずつ 計八名) 前時の続きで順繰り読み

二とく

○おさらい

- ・ 月が出るのは、今ではないので父さんは面白い話を思いつきました。一つは、本当に月が出る時間です。何時ですか。(夕食後)
- ・ もう一つは、子熊の夢を壊さない話です。どういう話ですか。(いそがしい ひまになる)
- ・ 父さんは、いろいろ気を使うんだと、子熊は思いました。誰に気を使っていると考えたの。
- ・ 本当は、父さんは誰に気を使っていたのでしょうか。(子熊)
- ・ そのことに気づかれなくてほっとした父さんでした。

◎承接

- ・ 帰ることになり、電車に乗る前に父さんの真似をしました。何ですか。(えいつ)
- ・ そして、電車に乗った子熊の様子はどんなでしたか。(黙って考えている)
- ・ 電車を降りて家まで帰る間に、黙って考え込んでいた訳がわかりました。何ですか。(えいつのやり方が分かった)

○手引き

指 今度、自分で『えいつ』をやってみたいと話したところから最後まで「」の所だけを書き出して子熊の嬉しさを考えてみます。

三よむ 黙読 (p22 十行目〜p23 十行目) 四かく 視写

「ぼく、今度、『えいっ。』を  
 やってみようかな。」  
 「いいとも。でも、なにが  
 おこるんだい。」  
 「ぼくのいちばんすきな  
 人を出すよ。」  
 「えいっ。」  
 「おかえりなさい。」  
 「ただいま。」  
 「なるほど。」

五よむ (指黙読一回 指音読一回)  
 六とく

○語義・区分(難しい言葉はと、問うた後で確認)  
 ・みようかな なるほど

・話者の確認後、子熊の顔の向きで三区分する。  
 ◎心

・子熊の気合の入った声はどれでしょうか。  
 (えいっ)

・自信をもって「えいっ」と言いながらベルを  
 押ししました。では、一番喜んでる声はどれで  
 しょうか。(ただいま)

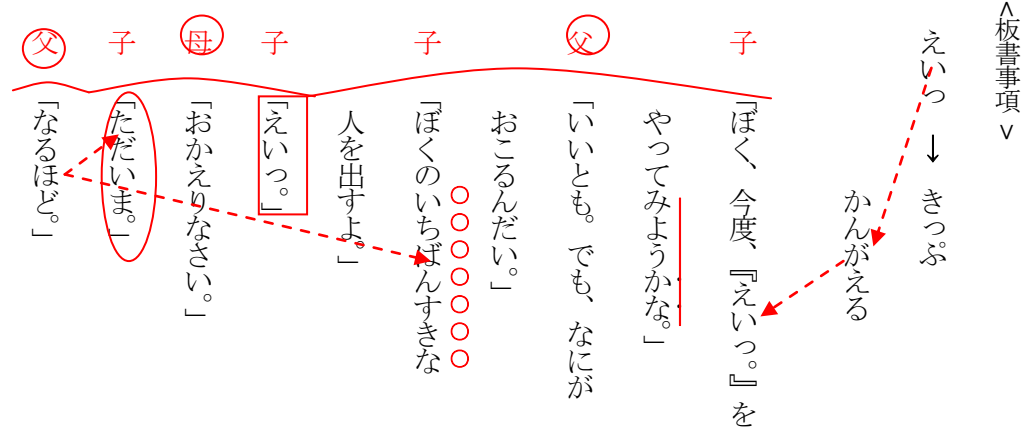
・そうですね。「えいっ」がうまくできたこと、  
 そして、迎えてくれた母さんの声もどんな声で  
 しょうか。(子供の感想を受け止める)

・父さんに「えいっ」の秘密が分かったもんね  
 と、ちよつと得意に言っているのはどれ。  
 (みようかな)

・自信があつたから言つたのね。どんな自信が  
 あつたの。(母さんが迎えてくれる)

・今日は、ポップコーンも買ってもらつたし、  
 父さんのように『えいっ』が使えるようになったし、  
 母さんが温かく出迎えてくれたし、夕飯  
 ではどんな話が盛り上がるでしょうね。

七よむ (指音読 一回 役割り音読一回 暗唱)



第二次指導 (新出漢字を中心に一時間扱い)

一よむ 六区画(2・4を二名ずつ 計八名)  
 前時の続きで順繰り読み

二とく

○おさらい

・子熊の「ただいま」をいってみましょう。  
 (三名ほどにいわせる)

・嬉しそうな声でした。どうして、そんな声になつたのかな。「えいっ」ができたこと、父さんとポップコーンを買いに町に行つたこと、母さんが笑顔で迎えてくれたこと

◎承接

・家のベルを押しながら「えいっ」と元気に気合を掛ける前に練習しましょう。どこですか。切符を買うときですが、誰のことをよく見ていたからできたのですか。(父さん)

・父さんのことをよく見て勉強しました。勉強するようになつてくれたのは誰ですか。

・どうして勉強しようと思つたのですか。

・父さんのように「えいっ」が使えるようになりたいと思つたからです。父さんが、最初に「えいっ」をしてくれたのは、いつでしたか。

・とうさんは、赤信号を待ちくたびれた子熊の様子を見て、面白いことを思いついたのね。それを子熊が大層喜んでくれたのでこのお話が生まれました。楽しい親子の話になりました。

○手引き

指 先生が黒板に漢字を書きます。その漢字を見て読み仮名をノートに書いてください。一行に一つずつ書きます。下は空けておいてください。

三よむ 黙読 (板書の漢字を黙読)



四かく (読み仮名を書く。最初に三つは全員で)

感心 かんしん  
黄色 きいろ  
思う おもう

一度 最初四個位書くの  
平気な を見させておき、そ  
今度 れから感心と黄色  
星 今度の読み方を問、答  
今夜 えさせてから書き  
今 方を指導する。思う  
今 気のどく の送り仮名には傍  
電車 線を引きかせる。  
見上げる

五よむ (指黙読一回 指音読一回)  
六とく

○文中の位置

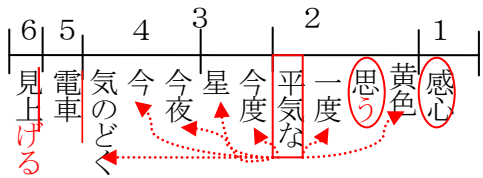
・ 黒板に書いた言葉が、六つに分けたどこに書いてあったかを考えます。(最初に出ていた場所) 5はどの言葉ですか。(電車)

- ・ すると、見上げるは、何番。(6番)
- ・ 3の所に出ていたのはどれかな。(今度 星)
- ・ すると、今夜と今と気のどくが4になるね。
- ・ 1と2は何処で分けるかな。(感心と黄色)

◎こもる力

- ・ このお話が面白い話になったもとは、どの言葉に一番出ているでしょうか。(平気な)
- ・ 父さんが、平気な顔をして言っている言葉はどれでしょうか。(一度、黄色、今度、星、今夜、今、気のどく、矢印をつける)
- ・ そんな父さんを見て子熊はどうしましたか。  
(感心し、偉いんだと思いました)
- ・ 父さんのように「えいっ」を使えるようになりたいと思った子熊ができたことが分かるのは、どの言葉ですか。(見上げる)

最初四個位書くの  
を見させておき、それから感心と黄色の読み方を問、答えさせてから書き方を指導する。思うの送り仮名には傍線を引かせる。



えいっ

△板書事項▽

七よむ (指音読一回 追加の言葉も)

- ・ そのヒントを見つけたことに関係する言葉は、どれですか。(電車の切符 電車の中で考えた)
- △裏芸 (漢字の面白さを見せる場)
- ・ 電 星 思 を使って漢字遊び
- 電 ↓ 雷 雨 十 田 雨冠の字体 電気
- 星 ↓ 日 十 生 (音読み セイ(生)) 星夜
- 思 ↓ 田 十 心 思い出

○余韻

「えいっ」って、面白いこと父さんは思いついたなあ。

とうさん  
くまの子  
かんしん  
きいろ  
おもう  
田 十 心  
思い出

日 十 生  
星夜  
雷 雨 十 田  
電気

△家庭学習 漢字を一回ずつ 下に書いてくる。

三日続けて出す。空白は自主学習  
\* 学校でも、三日に分けて四個ずつ書かせる。

△裏芸について

漢字の面白さに目が向くようにする。そのためには、多面的な扱いを心がける。注意点は、一度にたくさん扱わないことである。

例 今回の場合

- 一 車は、字源を扱うと喜ぶ。
- 一 部首 雨 日 心 (上下に分ける) 等
- 一 音読み、訓読み 「今」
- 一 送り仮名 「思 訓読み「おもう」で「おも」ではないこと。「おもう」「う」が送り仮名で、使い方で変化すること。「ワ行五段活用」この言葉を教えるのでなく、変化するところを送ることを知らせる。
- 一 熟語を作る。ここに出てくる漢字を組み合わせさせて作らせる。知っている熟語をいわせて漢字で書いて見せる。「感動 心配 気温 …」「星空 心根 色紙 …」「気持ち 度胆 …」

一 短文作り

一 教科書の付録の漢字一覧を使って遊ぶ。  
いろいろ組み合わせたりしながら、ほんのちよっぴり扱うのが味増である。自分で調べようという気にさせる。やり過ぎは食傷気味にさせる。